

金賞

幸せに生きる権利

横須賀市立衣笠中学校三年

小熊 愛乃

私の祖父母は耳が聞こえません。祖父は生まれつき、祖母は三歳の頃に高熱によって耳が不自由になってしまいました。祖父母は話すときに私の父とは手話、私とは筆談を用いています。

耳が聞こえないことは、見た目では判断できません。耳が聞こえる人は簡単に避けられる危険も、聞こえない人にとって避けることが難しいのです。常に危険と隣り合わせです。

目が見えない人や車椅子を使っている人も同じです。いつも安心はできません。

みなさんは、これまで例に挙げた、目や耳が不自由な人や車椅子の人をどう思いますか。例に挙げた人達に限ったことではありません。その他、病気を患っている人も同じです。

みなさんが思うことは、

「そんな風になってしまつて可哀想。」

でしょうか。それとも、

「できるだけ関わりを持ちたくない。」でしょうか。私は一度だつてそんな風に思ったことはありません。

私が小学生の頃のことです。祖父母は手話講習のボランティアとして小学校を回っているのですが、祖父がその一環で私が通っていた学校にゲストティーチャーとして来ることになりました。しかし、祖父にはとても気にしていることがあったのです。それは、私の父がまだ小学生だった時のこと。父は、友達に、

「お前の親の話し方、変だよな。」

などとからかわれたり、話し方の真似をされたりして、すごく悔しい思いをしたそうです。祖父はそれをずっと気にしていました。そのことがあったため、祖父はゲストティーチャーの話を断ろうとしていました。

「愛乃が恥ずかしいし、嫌だろうから。」と私のことを思ってくれていたのです。その話を父から聞き、私は、

「嫌じゃないよ。来てほしい。」

と答えました。私は、祖父がそんなことで悲しむ姿を見たくありませんでした。なぜ人は差別するのだろうと腹が立ちました。

その出来事があったから、私は「障害」について深く考えるよう

になりました。なぜ耳が聞こえないというだけで、目が見えないというだけで、自分達健常者とは違うものとして接する人達がいるのか。「障害」を抱えて生きる人達に対して自分ができることはないのか。考える中で大切だと気づいたことは、「障害」は「障害」ではなく、その人が持っている「苦手」だということです。私の祖父は耳が聞こえなくても二人で助け合って暮らしています。もちろん不自由なこともあります。自分の生活をより良いものにしようとパソコンを使ったり、友達と旅行したりなど、普通の人と変わらない生活を送っています。耳が聞こえなくても殻に閉じこもることなく楽しく暮らせる、これは、耳が聞こえないということが「害」にはなっていないからではないかと私は考えます。耳が不自由な人だけでなく、目が見えない人や車椅子の人と一緒にです。ただ聞くのが「苦手」なだけ。見るのが「苦手」なだけ。私達にだって苦手なことはあります。苦手なことが少し他の人と違うだけなのです。それを理解しようともせず、

「障害を抱えているから、私達とは違う。」と決めつけるのは間違っています。

私達がそうであるように、人とは違った「苦手」を持っている人

達にも幸せに生きる権利があります。目や耳が不自由な人を健常者とは違うものとして見ている人は、知らないうちに「苦手」を抱える人達の権利を侵してしまっていることになるのです。

だから、私は伝えます。「苦手」を抱えている人達の、幸せに生きる権利を追求するために。目や耳が不自由な人の権利を侵してしまう人を少しでも減らすために。「障害」というのはその人の持つ「苦手」なのだと周りに伝えていくことが、差別を減らす第一歩であると思います。自分の周りに目を向けてみて下さい。差別され、悩み、苦しんでいる人がいるかもしれません。その人達にとって、知ってもらえる、理解してもらえるとというのは大きな励みになるはずです。

最後に、私はこんな風に思える自分を、また、堂々と生きている祖父母を誇りに思います。目や耳が不自由な人、車椅子の人、病気を患っている人、そして健常者。全ての人の笑顔が絶えないような、全ての人が祖父母のように堂々と生きていけるような世界を作っていきたいです。この世の中にいる人が、理解によって幸福になれることを願っています。

周りの人に伝える。それは、今、私達にできる差別撲滅への近道ではないでしょうか。